

響

ウル

リム (響)

聖公会生野センター機関誌

第21号

2001年11月20日発行

題字：康秀峰

E-mail: ikuno.po@nssk.org URL <http://www.nssk.org/province/ikuno>

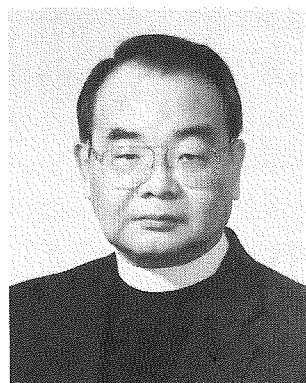
平和に至る道

興石 勇

テレビの画面に映った「テロリストに報復を」とこぶしを振り上げて叫んでいるアフリカ系と思われる青年の顔を見ながら、暗い気持ちになってしまいました。アメリカのシンボルとも言えるツイン・タワーや国防総省の建物が崩落させられ大被害を受けたのですから、アメリカ国民が怒りに燃えるのも無理はありません。しかし、ついこの6月にやけに安全になってしまったニューヨークを久しぶりに訪れ、ニューヨーク教区の都市問題と取り組む担当者の話を聞いたばかりの私には、アフリカ系らしい青年が示した素朴なナショナルリズムがどうしてもやりきれませんでした。

ニューヨークが安全になったのは、この青年の仲間の多くを含む最も貧しい人たちである野宿者に罰金を課すという政策によって、刑務所に送り込んだからでした。極端な言い方をすれば、「貧しい人々」はニューヨークでは犯罪者とされるのです。アングロ・サクソンであれ、アフリカ系であれ、収益率向上への貢献度によって振り分けられ、仮に貢献度の高い方に振り分けられてもいつリストラの対象となるか戦々恐々としていなければなりません。このような孤独や不安が、共通の敵を仮想した負の共同性の中に避難場所を見つけ、もしかすれば自分もその仲間である人々に「報復せよ」と叫んだとしても、誰もそれを責めることはできないかもしれません。

アメリカでの今回の惨事を引き起こした張本人が誰であれ、収益率を測定基準とする世界の中で、孤独や不安に押しつぶされた人々の怨念が、この異常行動の動機だったでしょうし、またその行動を正当化する理由として



事実用いられてもいるようです。アメリカとイギリスの政治指導者は、両国民の多くの人々の比較的冷静な反応にも関わらず、対タリバン攻撃に熱狂しているかのようです。「負の共同性」に駆り立てることによって、内部に抱える貧富の差を拡大せずにはおかないシステムに対する怨みの矛先を転じようと狂奔しているのではないのでしょうか。

9月11日の惨事に寄せた米国キリスト教界指導者の声明の中に、“Channeling Anger into Acts of Charity and Mercy”（怒りを善意と思いやりの行為に導く）というタイトルがありました（カトリック、ケンタッキー州ルイヴィル大主教の声明）。言うは易しではありますが、この挑戦を受け止める以外に平和に至る道はありえないと思えてなりません。

(こしいし・いさむ 司祭 日本聖公会管区事務所総主事)

もくじ

- 1 平和に至る道..... 興石 勇
- 2 時のしるし 「大きな淵」を越えるために..... 西原 廉太
- 3 濟州島と在日④（最終回） 濟州島と文学 一在日の恨を抱えて..... 文京 洙
- 4 藤永壮さん講演録 中学歴史教科書問題で日本社会が問われているもの
- 6 聖公会日韓青年交流プログラム とともにこの道を歩むために..... 卓 志 雄
- 7 こんな本あります 本から「在日コリアン」を考える⑦..... 高 二 三
- 8 聖公会生野センターの活動 写真と日誌でつづる聖公会生野センターの活動
- 10 各地の後援活動 聖公会生野センター大阪教区後援会の働きについて..... 岩城 聡／余韻

済州島と文学 —在日の恨を抱えて— 文京洙

二人の作家 おそらく、本誌が人の目に触れる頃、ある本が平凡社から刊行の運びとなる。『なぜ書きつけてきたのか、なぜ沈黙してきたのか—済州島四・三事件の記憶と文学』という、なんとも長いタイトルの本で、主に金石範（キム・ソクボム）さんと金時鐘（キム・シジョン）さんのお二人の対談からなっている。実は、私自身も企画と編集に加わっていて、私の四・三事件にかかわるこれまでの仕事にとっても一つの節目となる本である。もっとも、編集作業の大半を担ったのは一人の日本人の編集者で、この人の並々ならぬ思い入れと粘り強さがなければこの本が日の目を見るのはむづかしかったかもしれない。

四・三事件については、本誌の17号（済州島と在日①「金銀珪さんのこと」）でも紹介したのでここでは詳しく述べない。とにかくそれは、第二次大戦直後の解放の夢にわいた済州島を底無しの奈落へと暗転させた現代史の悲劇であり、事件の渦中を生きた人びとはもとより、この島にゆかりをもつすべての人びとの内面に決して癒えることのない恨（ハン）を植えつけた。いうまでもなく、金石範さんは、20年以上の歳月をかけた大作・『火山島』などで、四・三事件を執拗に描きつけてきた作家である。金石範さんは、済州島を故郷としながらも、その悲劇を直接体験したわけではない。しかし、むしろそれだけに、その作品には、圧政に立ち向かい犠牲となった故郷の人びとから隔たった在日を生きることの無念さや自責感、さらには底深い「ニヒリズム」の感触さえも漂う。

一方の金時鐘さんは、四・三の武装蜂起を主導した前衛政党的若き党員として悲劇のただ中を生きた詩人である。金時鐘さんは身をもって体験した悲劇の度しがたい苛酷さ、歴史の事実の圧倒的な重さに打ちひしがれてこれについて語り詠（うた）うことを奪われた詩人でもある。逆に、その半世紀の沈黙こそが「四・三事件」の真実を物語る一遍の詩として人びとの心を打つ。

そんなふうにお二人は、ともに在日を代表する作家でありながら、小説と詩、四・三にまつわる語りと沈黙という、互いに対照的な道を歩んでこられた。「なぜ書きつけてきたのか、なぜ沈黙してきたのか」というタイトルは、そういうお二人の「四・三事件」への向き合い方を現わしたもので、書名として決してスマートとはいえないが、

おそらく、これ以外のタイトルは考えられないであろう。

この本の元となった、二日間に及ぶお二人の対談は、それ自体が長い在日の歴史のなかで一つの事件である、といえるかもしれない。お二人は、ときには涙し、ときには怒り、ときには想いに沈み、ときには笑いながら四・三にまつわる思いの丈をぶつけあった。その壮絶ともいえる記録は、「四・三事件」の真実を照らし出すうえで意義深いばかりか、在日の戦後の歩みを奥深いところで問い直し、読む人の心を激しく揺り動かすだけの凄みと迫力に満ちている。

私は、一介の研究者として、そういうお二人の対談に立ち会う機会を得た。いま、その体験は、本誌でも報告してきた私の一年間の済州での生活につぐこの上ない済州島体験として私の心に深く刻まれている。と同時にそれは、済州島を故郷にもつ在日の二世として、生涯たずさえていかなければならない重い課題を私の前に置いた。

* * *

お別れ 今回で、私の済州島についての雑文を、いちおう、終えさせていただくことになった。済州島という至ってローカルな話題について書く機会を与えてくれた呉光現氏にあらためて感謝する。本誌での9回にわたる連載は、なによりも私にとって、この間の済州島にまつわる体験と想いを記録に留める得がたい機会であった。読者の皆さんにはそういう独り言のような雑文にお付き合いさせたことに申し訳ない気さえしている。とにかく、これで暫しのお別れである。最後に、いつも原稿が遅れて迷惑をおかけした鈴木恵一さんにお詫びとお礼を申し上げて締めくくりとしたい。

（むん・きよんす 立命館大学教授）

る。「聖戦」「聖なる戦い」という意味だとされるが、これも本来は、神（アラビア語ではアラー、アブラハムの神）の平和がこの地上に実現されるために身を粉にして奮闘努力すること、これが「ジハード」の本来の意味だ。イスラムの人々にとって、モハメッドとは、モーセ以降の預言者の伝統にある最後の預言者とされる。イスラムの聖典であるコーランには、モーセは律法という言をアブラハムの神から預かり、ダビデは詩編を預かり、イエスは福音を預かったとされている。ユダヤ教は正義という神のメッセージを伝え、キリスト教は神の愛を伝えた。そして最終的に完成された啓示をアブラハムの神から与えられた預言者がモハメッドであると、イスラムの人々は信じる。

このように、イスラムの人々は貧しく、また、アブラハムの子であり、モーセと預言者たちに耳を傾ける民である。そう考えながら、ルカによる福音書16章19節～31節をぜひ読んでみて欲しい。貧しいラザロと金持ちの男の間には、「大きな淵」があって決して越えられないという物語だ。私には、イスラムの人々は、まさにこの物語のラザロではないか、と思える。もちろん、イスラム教が発生するのはモハメッド以降の7世紀以降のことであるので、この福音書がイスラムと関係することはない。しかし、今、この時に、私たちはあえて、ラザロにイスラムの人々の顔を見ることが必要なのではないかと考える。私たちと、彼らの間には、越えることの出来ない、「大きな淵」がある。しかし、私たちが真に、「モーセと預言者」たちの声に聴き従って、真の平和（シャーローム）を求める時に、この「大きな淵」を越えることができるのではないかと確信したい。「暴力には暴力を」ではなく、真のシャーロームを求めたい。真の平和を実現するために苦闘したいと思うのである。

（にしはら・れんた 中部教区司祭・立教大学教員）

「大きな淵」を越えるために

西原 廉太

9月11日にアメリカで起きた出来事は、未だに、世界中の人々にさまざまな思いを生み続けている。皆さんはあの日、あの時、どのようにしておられたのであろうか。私は、ちょうど10時のニュースをテレビで見ていた。2機目がビルに突っ込む映像の衝撃、いとも簡単に2本の巨大な超高層ビルが崩壊する瞬間が生中継される衝撃。今この瞬間に何百、何千という人の命が奪われていく。それがリアルタイムで中継される。目の前で人がビルから落ちていく。生涯忘れられないであろう。その場にいてかろうじて生き残った方々、行方不明の方々、犠牲者の方々の家族にとって、一生消すことのできない心の傷となった。このような暴力行為は決して許されるものではない。

しかし、同時に、なぜこのようなことが起きたのか、その背景、まさにコンテキスト（文脈）についても、私たちはしっかりと考える必要がある。CNNで、ニューヨークのあるアメリカ人青年がこうインタビューに答えていた。「なぜ、アメリカがこのように攻撃されたのか、なぜ世界の富の象徴であるビルが攻撃されたのかを、私たちは黙想しなければなりません。アメリカがいったいこれまで世界で何をしてきたのかを、私はしっかりと考えたいと思います。」

今、アメリカはアフガニスタンに報復戦争を遂行中だ。この報復の結果、アフガニスタン周辺だけでも数百万単位の難民が飢餓状況に陥り、死の危険にさらされると言われている。アフガニスタンは極めて貧しい国である。ただでさえ、飢餓に苦しむ人々が無数にいる。否、世界の最貧国と呼ばれる貧しい国のほとんどがイスラムの国々だ。また、イスラムの人々は極端な原理主義者を除けば、本来、きわめて忠実に平和を求める人々である。「イスラム」という言葉はアラビア語だが、本来「平和」「純粋」「服従」を意味する。また最近報道で「ジハード」という言葉を良く耳にす



学校法人 松蔭女子学院

松蔭中学校・高等学校

1892年、英国のS.P.G（福音伝道協会）による創立以来、松蔭に一貫して流れる精神は、「愛と自由」です。

◆

〈併設校〉神戸松蔭女子学院大学・短期大学

〈住 所〉〒657-0805 神戸市灘区青谷町3丁目4-47

☎078-861-1105 ☎078-861-1887

URL <http://www.shoin-jhs.ac.jp>

中学歴史教科書問題で日本社会が問われているもの

藤永 壯

毎年、9月1日の関東大震災朝鮮人虐殺を憶え開催している「共に生きるを考える集い」。今回は朝鮮近代史が専門の藤永壯さんを講師に迎え、9月9日に大阪聖アンデレ教会で、集いをしました。

教科書採択の結果

昨年夏から、日本の中学校歴史教科書の記述が、社会問題・国際問題として大きく取り上げられてきましたが、8月15日に全国各地での教科書採択の結果が出そろいました。問題となった「新しい歴史教科書をつくる会」の歴史と公民の教科書は、いずれも0.1%以下の採択率であったことが確実にになりました。

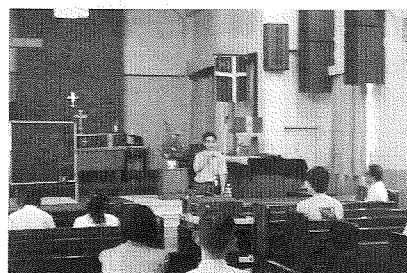
私も朝鮮近代史の研究者として、採択をめぐるさまざまな動きのなか、各地の集会で、この問題をどう考え、また「つくる会」の教科書の記述はどのような問題点をもっているのかということを中心に、お話をさせていただきました。

採択の結果が出た今、この問題を改めて振り返り、総括する時期にきているように思います。

韓国での反応

日本をよく知る韓国人からの反応として、この『ウルリム』第20号に姜 恵 楨(カン・ヘジョン)さんが印象的な文章を書かれています。「つくる会」教科書が検定に合格したことに「悲しみと恐怖を覚えた」気持ちを率直に表明しておられます。

今回の教科書問題をめぐって、韓国や中国などから「つくる会」教科書の記述を再修正せよとか、検定に合格させるべきではなかったという批判の声が上がりました。これを日本に対する内政干渉だという人もいますが、私はそれは正しくないと思います。韓国や中国の人々が言いたいことは、日本社会が将来韓国や中国をはじめとするアジアの人々と本当に望ましい友好的な関係を築こうと考えているのか、また日本の政府・国家にそのような決意があるのか、ということでしょう。「つくる会」教科書の出現は、日本のアジアとの関係構築の姿勢に対して不信感を抱かせるものでした。このたびの教科書問題で問われたことの本質は、日本社会・日本国家がアジアの人々、世界の人々とどのよう



な関係を結んでいこうとしているのか、ということにあると思います。

繰り返される教科書攻撃

日本の戦後史において、教科書の叙述が大きな社会問題になったのは、実は3回目のことです。そこで今回の問題は第3次教科書攻撃とも呼ばれています。

第1次教科書攻撃は、1955年、当時の民主党が『うれうべき教科書の問題』というパンフレットを発行したことからはじまりました。当時使われていた歴史教科書が「日本の歴史を暗く描き、日本の歴史を人民闘争史観に基づいて記述している」と強く批判されたのです。このころの時代背景として、戦後公職追放されていた右翼・国家主義者たちが追放を解除され、保守政治勢力と癒着し、復活していった政治状況を指摘することができます。

教科書攻撃のキャンペーンはそのような中で展開されました。この年(1955年)の学習指導要領改訂で、それまで存在していた日本の「侵略戦争」という言葉が消えました。翌56年には初めて教科書調査官がおかれ、教科書検定が強化されたことによって、検定不合格の教科書が続出する状況となりました。

次に第2次教科書攻撃は、1970年代末から80年代初めにかけて、元号法成立や靖国神社国営化の動きと連動しながら起こります。1982年になって、教科書検定を通じ歴史教科書の「侵略」という言葉を他の言葉に書き換えさせていたことが明らかになりました。このことはマスコミに大きく報道され、中国や韓国などから厳しい批判の声が上がりました。これが広く知られる1982年の「教科書問題」です。

このとき日本政府は、いったん検定を通過させた教科書に対して、記述の再修正を指示しました。後に近現代史の記述に関しては、アジア諸国との国際協調の見地に配慮するという、いわゆる「近隣諸国条項」が教科書検定基準に盛り込まれることになりました。

以後、検定での露骨な書き換えが控えられたこともあり、1980年代の半ばから教科書の記述はか

なり改善されたと評価されています。また時期を同じくして1980年代以降には、日本の侵略や植民地支配によって傷を負い、被害を受けながら、今なお解決されずに苦しんでいる被害者からの告発が相次ぎました。日本の侵略や植民地支配の問題は、過去のことではなく、現在生きている人にもいろいろなかたちで苦痛を与えていることを、私たちは改めて認識することになったのです。その象徴的な例がいわゆる「従軍慰安婦」の問題でしょう。こうした動きの中で、日本の侵略や植民地支配の歴史を見据えて教科書の記述に盛り込もうとする方向性が、定着したのだと思います。

しかし1995年に国会で日本の過去の戦争を反省する決議があげられたころから、これに反発して教科書の記述を攻撃する動きがまたもや現れました。第3次教科書攻撃のはじまりです。今回問題となった「新しい歴史教科書をつくる会」の活動は、その延長線上にあるのです。

「つくる会」の教科書は、日本という国家にとって都合のいいことは強調するけれども、都合の悪いところは簡単に記述したり、省略しています。他者に対する想像力が欠けているのも特徴の一つです。たとえば、日本は幕末に欧米諸国と不平等条約を結びましたが、「つくる会」の教科書では、この不平等条約によって日本人が誇りを傷つけられたことを強調します。しかし1876年に日本が朝鮮と結んだ日朝修好条規は、日本に有利で朝鮮には不利な不平等条約であったにもかかわらず、朝鮮の人々の「誇り」についてはとくに関心を示さず、日本の外交問題が解決したという観点から、日本国家に肩入れする記述を行っています。

また他の教科書には見られないほど、神話について多くのスペースを使い、歴史的な事実とおりでまぜて紹介しているために、神話と史実との区別がつきにくい叙述の体裁をとっています。昭和天皇については2ページの特集記事を組んでいます。戦前、絶対的な政治権力をもっていた天皇の役割や責任については極力触れようとせず、いわゆる「終戦の聖断」を賞賛する描き方をしています。

今回で終わらない教科書問題

1982年の教科書問題から約20年の歳月を経て、三たび教科書の叙述が政治問題化したわけですから、この問題がこのまま終わるとは思えません。「つくる会」は次回の2006年度から使用する中学校教科書も改めて申請するとか、小学校の歴史教科書や国語の教科書もつくりたいという意向を示しています。

また「つくる会」教科書の採択自体は低調に終わりましたが、一方で他社の教科書の記述が大幅に後退したことも指摘されています。「従軍慰安婦」について記述した教科書は非常に数が少なくなり、とくにこの問題を正面から取り上げた日本書籍の教科書は大きくシェアを減らしたと伝えられています。



さらに今回の一連の動きの中で、教科書採択の権限が教育委員会に集中させられる傾向が顕著になりました。日の丸・君が代の教育現場への強制問題とあわせて、今後、学校教育に対する政治的圧力がいっそう強まってくるだろうと予想されます。

教科書検定自体の問題も明確になりました。「つくる会」の教科書に対しては、基本的な事実の誤りが多数指摘されましたが、このことは教科書検定の過程でこうした誤りが見落とされたことを意味します。教科書の間違い探しという役割だけ見ても、教科書検定はその機能を十分に果たしていないことが明らかになったのです。

草の根の交流・草の根の信頼

教科書をめぐる議論が進む中で、さまざまな市民団体が危機感を持って活動したことは大きな意義がありました。私も教科書を考える集会で2回ほど話をしましたが、いずれも主催者の予想をはるかに上回る参加者が集まり、この問題に対する関心の高さを感じました。こうした市民一人一人の関心が「つくる会」教科書の採択を阻止するうえで、大きな力を生んでいったのだと思います。

その背景には20年前の教科書問題のころと比べて、日本と韓国との間に草の根の交流が格段に進んだ事情があると思います。今日の日本は、不況が続く閉塞状況の中で排外主義的な方向に流れがちです。草の根の交流が育んだ隣人との信頼関係を基盤に、友人を裏切りたくないという素朴な心情が、排外主義のわなに陥ることを踏みとどまらせたのではないかと、今回の問題を振り返りながら強く感じています。「草の根の排外主義」に対抗する「草の根の信頼関係」を培うことの大切さを改めて考えたいと思っています。

(ふじなが・たけし 大阪産業大学助教授)

文責：編集部

ともにこの道を歩むために…

卓 志 雄

「夏休み」といえば何年か前から私は「聖公会韓日青年交流プログラム」を連想します。「聖公会韓日青年交流プログラム」は1995年阪神淡路神大震災の救援ワーク・キャンプから始まりました。それ以来、韓日両国で交互に毎年開催され、今年で7回目になりました。私は今年も青年スタッフとして参加しました。

今年のテーマは去年と同じく「ともに歩もうこの道を（함께 가자 우리 이길을）」。去年は韓国における外国人労働者、今年是在日韓国・朝鮮人と寿（横浜の日雇い労働者の街）の人々と「ともに歩む道」を模索しました。それはただ単に彼ら・彼女らだけではなく、私たちの周りにいる「小さくされた人々」や「弱い立場にいる人々」とどうすれば「ともに歩めるか」を考えるきっかけとなりました。

過去の歴史により、相手の国に対する偏見や先入観や憎悪から、離れざるえなかった韓日両国の聖公会の青年たちは、このプログラムを通じて様々なことを勉強してきました。離れている間に、お互いを知らずに理解しようとせず無関心でした。そればかりか自分の周りに対しても関心は全く無く、自分のことしか知らなかったのです。しかし私たち韓日の青年は出会って、過去の歴史、偏見、先入観、無関心などの壁を越えて人間として、また神様に愛される兄弟・姉妹としてお互いを理解し始めました。それだけでなく、両国の小さくされた人々や弱い立場にいる人々にも出会い、そのことを理解して世の中を正しく見る方法をこの交流プログラムで学びました。

来年2002年のワールドカップの共同開催や日本の韓国観光ブーム、韓国の日本語勉強熱などによって両国の関係はより近付いたように見えます。ですが、過去の歴史から発生する政治的問題は両国間の壁を厚くしています。

この現実の中で、この先「聖公会韓日青年交流プログラム」が担う役割は重要だと思います。有意義なプログラムにするためにクリアしなくてはならない課題もあります。このプログラムは毎年一回限りのイベントで終わってはいけません。帰宅したら終わるのではなく、飲み会(?)から始め、勉強会やボランティアの活動まで発展させ、学んだことに対する関心をより深くすることが重要なことではないかと思ひます。

また現在、韓日の色々な民間団体が数多くの交流プログラムを行っています。「聖公会韓日青年交流プログラム」も他のプログラムと変わらないかもしれませんが。しかし私たちは共に聖公会の信仰に立つという共通の土台があります。このプログラムでの出会いにおいては、国籍など人為的なものが妨げになったとしても、他人ではありません。みんな神様の子であるからです。プログラムにおいて、私たちが神様の子であること、また「義・愛・平和の実践」という神様の命令を常に心に留めておくべきです。それを中心に、誰も真似できない私たち自身のアイデンティティをもってプログラムが進行されなければならないと思います。が、一方でそのアイデンティティは排他性や閉鎖性を克服し、開かれていなければなりません。このプログラムが、韓日関係においてキラリと光る役割を担っていくことを願ひます。

来年の韓国での開催準備はもう始まっています。今から楽しみに待ちましょう。

(たく・ちうん 立教大学大学院生)

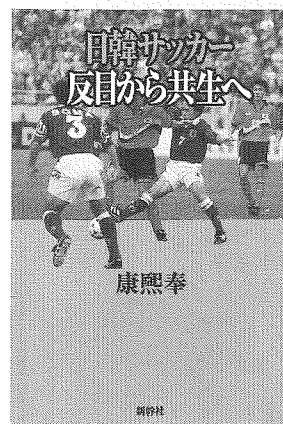


本から「在日コリアン」を考える ⑦

高 二 三

日韓サッカー 反目から共生へ

康熙奉（カン・ヒボン）著
定価1500円+税
新幹社



2002年のワールドカップサッカーの日韓共催をひかえ、今年の夏、日韓関係はさらに充実期に入るはずだった。はずだったと書いたが、現在のところ、日韓共催と言うよりは日韓分催と言った表現が当たっている状況だ。日本での教科書問題、小泉首相の靖国神社参拝など、マス・メディアも市民運動もそれ一色で染められた今年の夏だった。

日本の「民主主義」とは、かつての侵略戦争を正当化したり、公人として靖国神社参拝をしてしまったのち、アジアの被害者たちに「理解を求める」というものらしい。なんというおごり。これでは国際的なイベントを共に催すなんてことはできない。

今日のニュースでも、過去の問題（歴史）にはあまりこだわらず、未来志向で（韓国と）向き合いたいとのことである。韓国人が言うならまだしも……、あきれるばかりだ。しかし、日韓関係で日本の否を論じるのが本文の目的ではない。それでも、サッカーを通じて新たな地平を切り開くことができないだろうか、というのが今回のテーマである。

今日のニュースでも、過去の問題（歴史）にはあまりこだわらず、未来志向で（韓国と）向き合いたいとのことである。韓国人が言うならまだしも……、あきれるばかりだ。しかし、日韓関係で日本の否を論じるのが本文の目的ではない。それでも、サッカーを通じて新たな地平を切り開くことができないだろうか、というのが今回のテーマである。

今年の6月1日、ワールドカップ1年前という日、『日韓サッカー 反目から共生へ』という本を出した。出版のきっかけは、著者の康熙奉さんが、ある日突然、新幹社を訪ねてきたのに始まる。私は彼が、『知られざる日韓サッカー激闘史』（廣済堂出版）の著者であることを知っており、その著作を読んでいて。何をかくそう、ボクシングとサッカーが私は大好きなのである。その本は日韓サッカーの歴史を、植民地時代も含めて書いた労作である（現在は残念ながら品切れらしい）。

日本と朝鮮半島にはほぼ同時期の19世紀後半に

野球やサッカーが伝わった。そして、日本は学校教育の中で対校試合として野球が取り入れられていったが、朝鮮ではキリスト教会を中心にサッカーが広まっていった。キリスト教が朝鮮全土に広まる中で、礼拝のあとの楽しみとしてサッカーは国民に愛されるようになった。韓国でのプロサッカーチームの誕生時に「ハレルヤ」が創設されたことに象徴されるように、朝鮮半島ではキリスト教の布教とサッカーの広まりには密接な因果関係があったのである。

ベルリンオリンピックのマラソンで孫基禎（ソン・ギジョン）選手が優勝したことはよく知られているが、同じオリンピックのサッカー日本代表チームに朝鮮人選手がいたことは、その活躍も含めて一般には知られていない。

さらに「在日」に目を移せば、植民地時代、本国からやってきたチームへの応援や後援が並みはずれていて、サッカーが朝鮮民族の「国技」と言われる由縁をかいまみることができる。また、解放から1965年の日韓国交回復まで、「在日」のサッカー人が果たした役割の重要性についても書かれている。これらのことは、元来、ワールドカップサッカーを共催することになった国同士で、知識として前提になっていなければならないことだろう。『日韓サッカー 反目から共生へ』を読んで知ってほしいと願う。

しかし、歴史を知るだけでなく、現状と展望をふまえて、実現可能な提言も忘れていない。それは一言で言って、日本も韓国も互いに世界レベルのサッカーに選手もファンもなれるか、ということである。しかもサッカーファンにとっては夢のような楽しみな試合を見ることが可能となるということでもある。

日本と韓国は宿命のライバルであった。そして共に生きるライバルでなければならない。「在日」の役割が終わったわけではない。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『日韓サッカー 反目から共生へ』は
聖公会生野センターで取り扱っています。

TEL 06-6754-4356 FAX 06-6754-4357
e-mail: ikuno.po@nssk.org



オルタナティブツアー・海外旅行情報

(株)マイチケット 06-6304-7800

メール イカロス 毎週金曜発行のメルマガ
myticket@silver.ocn.ne.jp

ウェブ イカロス 情報満載のホームページ
http://www3.ocn.ne.jp/~myticket/

11月

- 3 韓国語教室美術鑑賞京都遠足（高麗美術館）
- 5 ガブリエル感謝祭
- 17 第50回こみち寄席（奇数月 第3金曜日）
- 20 生野精神障害者作業所運営委員会（毎月1回）
- 25 NPO法人精神障害者支援の会ヒット設立総会
- 26 済州4・3事件遺族会慰霊祭（生野）

12月

- 1 2000年度第3回聖公会生野センター運営委員会
- 2 シンポジウム当事者は今Ⅳ（大阪市東成）

1月

- 30 鈴木主事補フィリピン社会宣教活動研修（～2/15）
- 31 精神障害者の生活の場づくりを進める会くふすか
新年会（城南キリスト教会）

2月

- 3 京都教区社会部生野研修
- 13 こひつじ乳児保育園職員学習会
- 22 生野地域活動協議会委員会
- 〃 大阪教区在日・韓国朝鮮人宣教協働委員会
- 24 大阪教区後援会常任理事会
- 27 管区事務所 鈴木一氏センター訪問・英文レター取材

3月

- 4 3・1日韓の歴史を考える会（吉岡数子さん講演会）
- 5 呉光現主事韓国分かち合いの家視察（～21）
- 17 作業所・福祉ショップ「画布」開所式（生野）
- 24 マルセ太郎氏追悼会
- 25 富山聖マリア教会で奨励
- 29 日本製鉄戦後補償裁判傍聴（大阪地裁）

4月

- 1 済州島4・3事件の跡地と今を巡る旅（～4）
- 7 京都教区社会部会
- 10 韓国語教室新年度開講（毎週火曜日 午後7時～）
- 11 絵画教室新年度開講（毎週水曜日 午後7時～）
- 15 済州4・3事件慰霊祭（生野）
- 28 大阪教区後援会理事会

写真と日誌でつづる

2000年11月



11/17 第50回こみち寄席
笑福亭仁鶴さん特別出演



3/4 3・1日韓の歴史を考える集い
吉岡数子さん講演会
堺聖テモテ教会



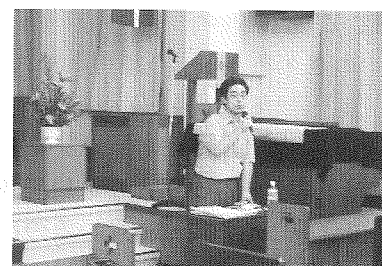
4/1～4 済州島4・3事件の
跡地と今を巡る旅

聖公会生野センターの活動

～2001年12月



韓国語教室
毎週火曜日午後7時
月に1度はお茶会



9/9 9・1共に生きるを考える集い
藤永壮さん講演会
大阪聖アンデレ教会



第2回
クリンもだん絵画展
10/7～14
應典院

5月

- 9 大阪府立住吉高校生野現場研修
- 10 教科書問題関西キリスト者集会（京都）
- 15 大韓聖公会分かち合いの家スタッフ関西研修（～6/15）
- 19 歴史教科書を問うエキュメニカル全国青年会議（～20 名古屋）
- 27 京都聖ステパノ教会講演

6月

- 6 日本聖公会婦人会総会に出席
- 10 韓国語教室 野遊会
- 16 李在禎司祭（大韓聖公会、韓国国会議員）と面談（名古屋）
- 23 H I T設立記念集会（東成）

7月

- 1 教科書を検証する歴史研究者シンポジウム（京都）
- 4 小さくても大きなもの展（絵画教室受講生グループ展）
- 12 大阪市大大学院生二階堂氏センター訪問
- 27 在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会 長野県・松代研修（～29）

8月

- 3 精神障害者社会復帰施設「ふれあいの里」訪問（大阪市西成）
- 11 移住外国人と連帯する全国フォーラム（～12 大阪市天王寺）
- 16 聖公会日韓青年交流プログラム（～22 神奈川県）

9月

- 6 真田山プール障害者入場拒否問題交渉（大阪市天王寺）
- 9 9・1講演会共に生きるを考える集い（藤永壮さん講演会）
- 14 堺・泉北市民講座講演（大阪府堺市）
- 18 プール学院PTA役員センター訪問
- 20 グループホーム・H I T運営委員会
- 29 こひつじ乳児保育園運動会
- 30 大阪聖パウロ教会主日聖餐式証し

10月

- 7 第2回クリンもだん絵画展（～14）
- 11 韓国自由の家（野宿者支援機関）スタッフ研修
- 16 聖公会社会福祉連盟第45回大会（～19 韓国ソウル）

学校法人 プール学院

1879年英国聖公会C.M.S.により創立、最初の日本伝道主教で女子教育機関設置に功のあったA.W.Pooleを記念して校名とした。1999年に創立120周年を迎えた。

法人本部

中学校・高等学校(女子)

〒544-0033 大阪市生野区勝山北1-19-31
TEL 06-6741-7005 FAX 06-6731-2431

大学

プール学院大学大学院(国際文化学研究科) 共学
プール学院大学(国際文化学部) 共学
プール学院大学短期大学部(秘書課) 女子

〒590-0114 堺市模塚台4-5-1
TEL 0722-92-7201 FAX 0772-93-5525

「世界の市民」の育成



St. Andrew's University
桃山学院大学

Fostering Citizens of the World

- 文学部／英語英米文学科・国際文化学科
- 社会学部／社会学科・社会福祉学科
- 経済学部 ●経営学部 ◆大学院

■法学部／法律学科(2002年4月開設・設置認可申請中)

〒594-1198 和泉市まなび野1-1 ☎0725-54-3131 <http://www.andrew.ac.jp/> 泉北高速「和泉中央」下車

■桃山学院高等学校／英数コース(男子)／標準コース(男子)／国際コース(男女共学)

〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町3-1-64 ☎06-6621-1181 地下鉄「昭和町」下車

聖公会生野センター大阪教区後援会の働きについて

岩 城 聡

大阪教区後援会は、大阪教区の教役者・信徒が一丸となって、聖公会生野センターの働きを財政その他の面で支えるために作られた集まりです。各教会から理事を選出していただき、理事会を構成して活動の内容や仕方を相談して決めています。また、日常の活動は、理事会で互選された常任理事会が担当しています。会長は高野主教様にお願いしていますが、主教様はお忙しい日程の中を、いつも理事会にご出席下さり、霊的なご指導をお与え下さっています。

皆様もご存じのように、聖公会生野センターは、日本聖公会が過去の歴史に対する反省を踏まえ、地域の在日韓国・朝鮮人との共生を目ざして、地域活動センターとして設立したものです。そして民族や文化、歴史が異なる人々が共に働き、全ての人が尊重される社会の実現に向けての活動に取り組んでいます。

私は、後援会の会計を担当させていただいていますが、このようなセンターの活動は、神様ご自身がこの地ですすめられている和解の業、宣教の業であると感じています。そして、その業に皆様と共に与ることができるお恵みを感謝しています。

聖公会生野センターの活動を支えるには、かなりの財政基盤が必要です。大阪教区後援会でも、個人会費や団体会費、一般献金など、さまざまな形で皆様にご協力をお願いしています。どうか、神様のご栄光を現すために、ご協力を賜りますようお願いします。また、今年は教会の皆様をはじめ多くの方々にセンターの活動を知っていただくという活動にも力を入れており、センターで最近作成された10分ほどのビデオやその他の材料を活用しようということが相談されています。ビデオは是非一度、ご覧下さい！

(いわき・あきら 石橋聖トマス教会信徒)

余韻

●聖公会生野センターが10年！この間の大きな出来事は何だろう？5周年の大イベントかな？猪飼野生まれの芸人マルセ太郎さんの死かな？様々な思いが心を駆けめぐる。その中で一番こころに残っているのは、近くに住むある在日の独居老人のサポートである。最後まで（天に召されるまで）地域生活を支援したかったが、最後はホームで亡くなった。だけど、身寄りもなく「あのまま」では確実に人知れずひっそりとなくなっていたかも知れないと思うと、多くの人に関わって支えたことは私の「支え」になっている。●今回で文京洙さんの連載が終わった。聖公会生野センターが大切にしている「マイナーなテーマ」にもかかわらず、毎回、忙しい中を原稿を送ってくださり感謝している。先日、勤務先の立命館大学を訪問し、この間の謝辞を述べると共に、大学のキャンパスを歩いた。私の大学時代と違い学生たちが「すばらしいキャンパス」で過ごしていた。彼らが真理を追究する学徒になることを期待する。●文京洙さんの連載の終了と共に、新しく「時のしるし」の執筆者も交代した。松山献さんがあまりにも多忙で書く余裕がなくなったことのその一因だ。「企業の前線」に立つ厳しさを見せられたが、松山さんの健闘を祈るとともに、今回からの執筆者の西原廉太司祭の鋭い「筆」に期待したい。次号からは編集委員会の改変をし、紙面の充実を図ることになる。新しい連載も始まるが、それは次号のお楽しみにとっておこう。●来年に10周年を迎える聖公会生野センター。10年を振り返りこれからの10年を示す10周年にしたいものである。（ピックアップチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費

年額 1口 3,000円（個人） 1口 10,000円（団体）

・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」

・銀行振込 三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail:ikuno.po@nssk.org

<http://www.nssk.org/province/ikuno>

発行人：木 村 幸 夫

編集人：大 橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。